

1979年の北京の春における 政治的要求についての考察

——当時の地下出版物を中心に——

金牧 功大
(高橋研究会 4年)

はじめに

- I 北京の春と地下出版物
 - 1 北京の春と地下出版物
 - 2 北京の春の始まりと終わり
- II 地下出版物から読み解く政治的要求
 - 1 読解にあたり念頭においた問い
 - 2 『探索』
 - 3 『求是報』
 - 4 『四五論壇』

おわりに

はじめに

一般に中国は非民主的な国家である、との批判がなされる。しかし、これは中国において民主運動が存在しなかったことを意味しない。中国の歴史を見れば、中国は決して民主不毛の地ではない。確かに、民主を主張する者の多くが抑圧され、幾度となく政治や権力によって蹂躪されてきた。しかし、民主を求める運動はコンスタントに存在してきた。こうした民主運動において人々が、どのような政治的要求を主張していたのか検討し考察することによって、彼らの民主的な構想力を示すことができるだろう。この考察は現在の中国政治を、そして将来の中国政治を考えるうえで重要な意義を有している。

本論文は1978年秋から1979年春にかけて北京を中心に中国各地で巻き起こった

民主を求める運動——北京の春——の最中に発行された中国版サミズダートともいえる地下出版物に注目する。

本論文において、筆者は以下のことを明らかにするだろう。第1に、「北京の春」の期間において、北京で発行された地下出版物のうち、主に未だ先行研究に用いられていないものの内容を明らかにするだろう。第2に、本稿において明らかにした記事の内容を利用し、出版物の発行者たちがどのように当時の中国政治をとらえていたのか、また「民主」をどのようにとらえていたのか明らかにするだろう。当時の若者たちがどのような政治的要求を掲げていたのか¹⁾、その一端を読み解き、分類したい。分類にあたって、筆者は新たな分析枠組みを示す。詳しくは第Ⅱ章で論じたい。

本稿は以下の4種類の地下出版物を扱う。1つ目に、《探索》編集部『探索』5期(1979年10月1日)²⁾。2つ目に、『求是報』第16期(1979年10月27日)。3つ目に、北京《四五論壇》編集部主編『四五論壇』13期(1979年10月)。4つ目に、北京《四五論壇》編集部主編『四五論壇』14期 慶祝北京西単民主墻誕生一周年記念刊 慶祝北京《四五論壇》創刊一周年記念刊 増刊(1979年11月)。上記の『探索』と『求是報』の内容は、先行研究において全く用いられてこなかったものである。また、2つの『四五論壇』に関しては下述の劉勝驥による先行研究において用いられているが、魏京生に関する記事が用いられているのみであること、また地下出版物の原本を入手できたことから扱うこととする。

地下出版物に関する先行研究として、管見の限り最も広範な内容を扱っているものは、劉勝驥『中国大陸地下刊物研究(一九七八—一九八二)』台湾商務印書館(中華民國74年、1985年)である。本研究書は、当時の地下発行物をその性格によって分類し、出版物ごとに説明を加えている。

地下発行物を用いた研究に班璋「現代中国における人権論の展開：『北京の春』運動を中心に」『山陽論叢』第2巻、山陽学園大学(1995年)がある。この論文で、班璋は多くの地下出版物を用いて新中国成立以降の人権思想の発展について論じている。また、論文末尾には100種にも及ぶ地下出版物の雑誌名と発行期間、代表者と連絡先、内容と性格に関する一覧が付されている。

地下出版物に関する資料集として台湾で出版された「大陸地下刊物彙編」專案小組『大陸地下刊物彙編』中共研究雜誌社がある³⁾。本資料集は合計13冊から成り、管見の限りでは地下出版物に関する最大の資料集である。本資料集は、地下出版物の記事を繁体字を用いて書き起こしている。

I 北京の春と地下出版物

1 北京の春と地下出版物

北京の春において人々は自由や民主、人権を要求し、そうした政治的要求を大字報の形で屋外の壁に張り出し公表するようになった。しかし、壁新聞の形では、書き写すのに時間がかかるうえ、別の壁新聞に覆い隠され、自身の意見が他人の目に触れなくなってしまう。こうした状況を避けるため、自ら雑誌を編集し、ガリ版刷りで出版し民主の壁において販売を開始した⁴⁾。中国全土で多種多様な地下出版物が発行され⁵⁾、その数は北京だけでも50種類以上にのぼった⁶⁾。地下出版物の発行は、主に1979年に集中している⁷⁾。管見の限り、創刊号の刊行年が明らかかなものが39種類ある。このうち28種類が1979年に刊行されている⁸⁾。

当時、地下出版物を印刷するためには多くの労力を費やさなければならなかった。例えば、1978年12月に創刊された朦朧派文学雑誌『今天』の主要なメンバーであった舒婷は香港科技大学での講演で『今天』の創刊当時、生活はとても苦しく、何人かでお金を出し合いガリ版で詩を刷り、それを西単民主の壁に張っていた、と述べている⁹⁾。地下出版物を取り巻く環境は決して良好とはいえなかった。

地下出版物の内容はバリエーションに富み、政治や経済、国外事情、文学と幅広い内容を扱っていた。また、毛沢東や鄧小平、そして文化大革命に対する評価も多様であった。

2 北京の春の始まりと終わり

北京の春の始まりと地下出版物の相次ぐ発行の理由について、主に2つの見解がある。1つ目は、鄧小平と華国鋒の権力抗争が反映されていた、という考え方である。2つ目は、文化大革命で辛酸を嘗めた人々が、第一次天安門事件を経て、雪解けのムードを感じとり意見を表明し始め、その意見を広めるために地下出版物を発行し始めた、というものである。

北京の春は、弾圧によって終わりを告げた。では何故、鄧小平は当初、運動を支持していたにもかかわらず、弾圧を開始したのだろうか。それは中越戦争が終結を迎え、国内問題に集中することができるようになり、民主の壁の問題に取り組みことができるようになったからである。そして、共産党の統治は絶対には崩すことができない、そして文化大革命のような混乱は必ず避けなければならない

という党内での共通認識が鄧小平に弾圧の路を選ばせたから、という2つの理由から説明できるだろう。

Ⅱ 地下出版物から読み解く政治的要求

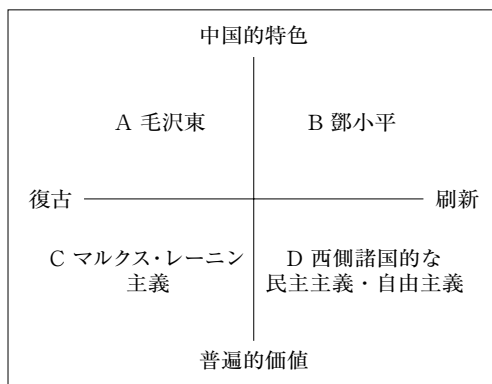
1 読解にあたり念頭においた問い

本章では、まず『探索』と『求是報』、『四五論壇』に関する先行研究を紹介する。そのうえで、これまで内容が明らかにされてこなかった合計4冊の地下出版物を、いくつかの問題意識を念頭に置き読解し、その内容を紹介する。そして紹介した記事の内容を分析・分類する。本論文の執筆にあたり、筆者は以下の問題意識をもって読解した。

問題意識とは、すなわち、第1に地下出版物の著者たちは、毛沢東をどのようにとらえていたのか、第2に文化大革命をどのようにとらえていたのか、第3に華国鋒や鄧小平といった当時の指導者たちをどのようにとらえていたのか、第4に社会主義をどのようにとらえていたのか、第5に著者たちは、どの程度外国の影響を受けていたのか、第6に今後の中国がいかなる方向に進むべきであると考えていたのか、第7に「民主」をどのように構想していたのか、である。第1と第2の問いを通じて、著者たちが過去をどのように評価していたのか理解することができる。また、第3と第4の問いは、彼らの当時の政治に対する評価を明らかにすることができる。第5の問いは、著者たちの思想に対する外国の影響を、また、第6の問いと第7の問いは、著者たちの国の未来を構想する力を明らかにすることができる。本論文では、記事を上述の問題意識をもって読解したうえで、その内容を分析・分類する。分類にあたっては図1に従って行うこととする。

この分類枠組みでは、各記事の著者のもつ政治的な構想の方向を4つのカテゴリーに分類する。1つ目は、毛沢東は正しかったのだが、毛沢東の「本来正しかった」政策を林彪と四人組が捻じ曲げてしまった。よって、本来の毛沢東の政策に回帰するべきであるという考え方である。こうした思想をもつものをAに分類する。2つ目は、新しい中国の進む道を構想するにあたって、過去とは違う新しい道を見出そうとする考え方である。しかし、その道は西側諸国的な道ではなく、中国的特色をもっているものである。その代表的な人物が鄧小平である。こうした考えをもつものをBに分類する。3つ目は、今後、中国の進む道は社会主義であり、よって正統なマルクス・レーニン主義に学ぶべきである、という考え方

図1 分類枠組み



である。これは、これからのあり方を過去に求めるという「復古」の考え方である。こうした考えを主張するものをCに分類する。4つ目は、これからの中国のあり方は、新しくあるべきで、かつ西側諸国的な民主主義や自由主義によるべきである、との考え方である。魏京生は、このカテゴリーに属している。こうした考えを主張するものをDに分類する。

2 『探索』

(1) 『探索』の性格

『探索』の創刊号は1979年1月¹⁰⁾に発行された。台湾の研究者である劉勝驥はこの出版物を「激烈派民刊」と形容している¹¹⁾。この『探索』を有名足らしめている主な人物は、魏京生であろう。魏京生は『探索』創刊のメンバーである。また、魏京生が主要なメンバーであったことから、彼の逮捕後は彼の解放を求める記事が多い。

『探索』が創刊された経緯は、以下の通りである。創刊時のメンバーは、動物園の電気技師であった魏京生と北京工学院の学生、楊光、北京電子顯示儀廠の労働者、路林の3人であった。いずれも20歳代であった彼らは、中国社会が遅れてしまった真の原因を探究するためには、研究と討論を進め、その結果を社会に持ち出し検証するほかない、という結論に達した¹²⁾。この目的を達成するため魏京生は出版物を刊行することを提案した¹³⁾。こうして生まれたのが『探索』である。『探索』に掲載された記事の中で、特に有名なものが民主の壁から転載された魏

京生の「第五の近代化——民主及び其の他（筆者訳）」¹⁴⁾ という記事である。

本出版物は3月29日に魏京生が拘束されたことを受け、1979年3月31日から10月1日に第5期が再刊行されるまでの間¹⁵⁾、出版が途絶えていた。

連絡先として第3期には魏京生の住所が¹⁶⁾、第5期の紙面には路林の住所が明記されている¹⁷⁾。また、第5期には毎週金曜日12時から午後5時まで、編集部への訪問を受け付ける、とも明記してある¹⁸⁾。販売価格は各期0.4元であった¹⁹⁾。

(2) 《探索》編集部『探索』5期(1979年10月1日)の内容

《探索》編集部『探索』5期(1979年10月1日)は、合計36ページからなり、20本の記事を掲載している。この『探索』5期は、魏京生の逮捕による刊行の一時中断以降、復刊最初の期である。『探索』の編集者たちは自身を、真理を探究する青年と称している²⁰⁾。

(a) 《探索》編集部「声明」

この記事は1979年9月11日に《探索》編集部が発表したものである。「声明」の概要を以下に示す。中華人民共和国成立30周年を迎えるにあたり、我々は関係当局に対して「中華人民共和国刑法」及び「刑事訴訟法」を履行するように、思想や言論、信仰の自由を理由に逮捕された中華人民共和国公民を無条件に釈放するように強く要求する。我々はこれ以上冤罪やでっち上げ、誤審を望んでいないし、流血も望んでいない。我々は人民の監獄が人民を拘禁しないことを望んでいる。同時に、政府が真剣に司法システムを整理し、司法システム内に潜むファシスト分子を取り除き、人民に残虐行為を行う血債を負ったものを法廷において裁くことを願う。このようにしなくては、法律の公正を保障することはできない²¹⁾。

(b) 鳴鏑「櫺窗下の民主」

この記事は序章と合計6つの段落、そして結論から構成されている。著者である鳴鏑は、警察による監視の例を紹介し、民主の壁を取り巻く現状を批判している。本論文では、いくつかの段落を抜粋し、その内容を紹介する。

序章において著者は「民主の壁」を外国人が「民主のショーウィンドー」と呼んでいることを指摘したうえで、民主の壁の4つの作用を主張している。第1に、新聞の作用がある、こと。つまり、民主の壁は中国の言論と新聞の自由を表現している、ということである。第2に、裁判所の作用がある、こと。すなわち、民主の壁は多くの受難者がそれを告発する場所である。第3に、芸術展の作用がある、こと。換言すれば、多くの無名の青年たちが自身の作品を出品する場所であ

る、ということである。そして、最後に監獄の作用がある、こと。つまり、民主の壁には中国の輝かしい未来のために身をささげた青年たちを監獄へ連れていく作用がある。第3段落「説話要当心」で著者は、四人組が打倒されてから人々は家や職場で話をするとき、ただ1つの場所——西単民主の壁——を除いて盗み聞きされることを、さほど心配しなくてもよくなったと述べている。著者は民主の壁は警察の密度が最も高い場所であり、あなたの話を聞いている者が3人いれば、そのうち2人は警察かもしれないと警告している。最も積極的に「民主討論会」に参加している人は警察であるだろうし、あなたが不注意に何か話してしまえば、それを録音されるのみならず、あなたの写真が警察の「花名冊」に加えられてしまうだろう、と警告している。第4段落「不要和外国人来往」において、著者は外国語を学ぶ知人が外国人と交流したところ警察から注意を受けた話を紹介している。本段落では以下の話が紹介されている。新聞は、中国人が外国人と交流し家に招くことは問題ないと報じ、公安部の高級官員もアメリカ大使館に対して、中国人が外国人の家に招かれても差し支えないと保証している。しかし、著者の友人がこの情報を聞き、外国語を学ぶため外国人と交流したところ、ほどなくして公安局が彼の父親に警告し、またその交流の様子の詳細な記録を見せたという。

結論の段落において著者は、以下のように問う。三中全会が「民主」を力強く発揚して以来、華国鋒総理は「足取りをより速くし、思想をより解放しなければならぬ」と述べた²²⁾。しかし、総理は「より解放」とは、どれくらいのことを指すのか示しておらず²³⁾、人々は歩みを速め、結果、監獄に突き進んでしまった。一体、「より解放」するとは、どういうことなのだろうか。もしも本当に「民主」を行うのならば、なぜ民主の壁を監視と弾圧の対象とするのか。続けて以下のように批判する。我々は、気取った態度でソ連のKGBを嘲笑しているが、中国にもKGBがいる。もし本当に心から民主を行うのならば、まず警察の専制を取り締まらなければならない。資本主義社会においてとくに保障されている公民の権利が保障されていなければ、いわゆる法制や社会主義民主は、ただの絵空事に過ぎない。我々はずっと「四つの近代化」を宣伝しているが、1つ目の近代化、すなわち政治民主化がなされる前には、これは永久に水に映る月に過ぎないのである、と²⁴⁾。

(c) 秋木「社会專欄」

本記事は1979年9月に秋木が執筆したコラムで、著者は3つの社会関連ニュースを題材に自身の意見を述べている。例えば、最近の北京電視台の番組の内容が、

昔のように貧しいと批判したうえで、以下のように主張している。我々は、社会主義国家であり、人民のために服務するというのが第一であるはずだ。しかし、資本主義国における商業と社会サービスは、我々のそれよりもよい。「四つの近代化」を進めるとともに、関係する部門は民衆のことを考えてほしい、と²⁵⁾。

(d) 編集部「対於国家関係声明」

本記事は編集部によって執筆され、1979年9月16日に民主の壁に掲示された。記事は「本日、ソ連と中国の会談に際して、世界に向け中国人民は世界の人民と同様に平和を欲すると厳粛に宣言する」(筆者訳)という一文から始まる²⁶⁾。そして以下のように主張している。我々は、両国が良好な関係を築き、平和裏に、お互いに干渉することがないことを願う。これはすべての文明国家の希望である、と。そして、以下のように訴えかける。我々は中国とソ連の、また中国とベトナムの人民の流血が続くことを望まないし、中国とベトナムの間で再び戦争が起こることも望まない。国際緊張を緩和することが世界的な潮流である。人類の共同利益である平和のために我々自身が力を尽くそう、と。

この記事の直下に、同年9月22日付の「抗議」と題された文章が掲載されている。記事「抗議」によると、上述の記事は民主の壁に貼られた2日後に撤去されてしまった。これに対して探索編集部は、人民には国家の内外政策に対して意見を表明する自由がないのか、国家の少数の指導者のみが外国政策について討論するのか、と意見を表明している²⁷⁾。

(e) 張希峰「我的一張大字報——写給華国鋒、鄧小平」

本記事は山西省の張希峰が1979年8月29日に北京で発表した合計8頁、10段落からなる大字報を転載したものである。冒頭部分で著者は、華国鋒主席と鄧小平副総理に対して一般市民の冤罪、でっち上げはいくつは正されたのだろうか、また憲法上規定されている公民権までもが偽物であったのか、と質問を投げかけている。また、西単の民主の壁はスパイの厳格な監視の下、指導者たちの意に適った大字報が貼られるのみである、と述べている。そして、著者は以下のように華国鋒と鄧小平を批判する。党や国家の最高指導者に関する大字報を張る者がいないのは、指導者たちが優れ問題がないからであろうか。西単民主の壁に華国鋒と鄧小平に対して書かれた大字報が一枚もないということは、彼らに対して意見がない、彼らは完全無欠であることを示しているのでは決してない、ということである²⁸⁾。

(3) 『探索』 5 期の内容の解釈と各記事の分類

第1に、『探索』の著者たちは現実に存在する問題を端緒に、様々な政治的な要求を行っている。例えば、思想や言論が原因で拘留されている者がいるという現状や民主の壁での監視や外国人との接触に対する監視が行われているという現状をもとに、思想や言論の自由を求めている。この点において、彼らは単に外国からの影響を受けて政治的な要求を掲げているのではなく、中国国内に政治的な要求の必要性を見出しているのだ、といえる。これは第5の問いに対して答えを与えている。もちろん外国からの影響は否定できないし、むしろ大きかったともいえよう。しかし、彼らは決してただ外国の思想や理論を主張するだけではなく、これらをどのように利用すれば中国の諸問題を解決できるのか、また自身の権利を主張できるのかを考えていた。すなわち、著者たちは外国の思想を用いて、中国の問題を解決し、改革を求めていくべきであると考えていた。ただ単に外国に憧れ、スローガンを口にしていただけではなく、あくまで視点は中国にあり、自国を改善する手段として外国の思想——西側諸国的な自由主義や民主主義の思想——を利用しようとしていたのである、といえるだろう。

第2に、彼らは多くの要求——思想・言論の自由や政治犯の釈放等——を法律に基づいて要求している。例えば、「声明」において著者は「司法システム内に潜むファシスト分子」や「人民に残虐行為を行う血債を負ったもの」などが、超法規的な方法によって取り除かれるのではなく、あくまで司法の枠組みの中で裁かれることを望んでいる。『探索』第5期においてなされる、ほぼすべての政治的な要求は憲法や刑法、刑事訴訟法などに基づき法律という枠組みの中で行われている。著者たちは「依法治国」という原則を理解し、また法を盾に政治的な要求を行っている。法律を盾に権利を主張するという、今日においては当然と思われることも、青年時代を文化大革命の大混乱の中で過ごし、また正式な高等教育を受ける機会を奪われた青年たちにとっては、新しい主張であったのではないか。これは第6と第7の問いに関係しているだろう。

第3に、著者たちは国際関係に対して意見を述べている。例えば「対於国家関係声明」において編集者は「平和を希求する」と述べている。この「平和を希求する」という言論に関しては、何ら目新しい主張はない。しかし、この記事の直下に掲載された「抗議」と題された文章は注目に値する。なぜならば、編集者はこの文中で、人民が国家の重要な決定に参画する権利がある、ということを主張しているからだ。編集者たちは以下のように主張している。人民には国家の内外

政策に対して意見を述べる自由がないのか、国家の少数の指導者のみが外交について討論するのか、と。この記事は、第7の問いに答えを与えよう。彼らは、対ソ連、対ベトナムの国際関係を題材に、人民には国家の決定に対して意見を述べる権利があり、かつ関係する討論は一部の指導者のみが行うべきではないと主張している。これはある意味、主権在民という政治のあり方の萌芽ということができるとは限らないか。確かに、編集者たちが主権在民を構想していたとは言い切れない。しかし、それにつながる考えをもっていたことは本記事から理解できる。

第4に、秋木は「社会專欄」で、商業や社会サービスにおいて、資本主義国が社会主義国に優れていることを認めている。同様に、鳴鶴は「櫺窗下の民主」において、資本主義社会においては公民の権利がとくに保障されていると述べている。彼らは、どちらも資本主義社会の社会主義社会に対する優位を認めている。しかし両者とも中国社会は、やはり社会主義の枠組みの中で改善するべきであると論じている。これは第4と第6の問いに関係する。社会主義という制度にとらわれているという点で、秋木など当時の著者たちの中国の未来に関する構想力には限りがあったといえるだろう。

第5に、「我的一張大字報——写給華国鋒、鄧小平」において著者の張希峰は、華国鋒と鄧小平を批判している。また、「櫺窗下の民主」の著者は、華国鋒の示した「より解放」とはどの程度のことを示すのか曖昧であり、結果、多くの人が拘束されたと、華を批判している。このことから、華国鋒ら当時の指導部に対して否定的な見解をもっている著者がいたことが明らかとなった。これは、第3の問いに対する答えとなる。

各記事を上述の分類枠組みにあてはめて分類する。「(a) 声明」及び「(b) 櫺窗下の民主」、「(c) 社会專欄」、「(d) 対於国家関係声明」、「(e) 我的一張大字報——写給華国鋒、鄧小平」はいずれも図1のDに分類できる。管見の限り『探索』第5期に掲載されていた記事の著者はD、すなわち西側諸國的な民主主義・自由主義の思想をもっていたことになる。

3 『求是報』

(1) 『求是報』の性格

『求是報』の創刊号は、1979年1月1日に出版された。筆者が確認できた限りでは、1979年11月24日発行の第17期が最終期であり、約12か月間の間に、合計17期発行された。この地下出版物の内容は、政治や法律、社会、文学と多様性に富

み、また記事の内容は左右を問わず掲載され、いたって中立である²⁹⁾。例えば、『探索』は主に西側諸国型の民主主義を主張した。しかし、『求是報』は、基本的な立場をもつことなく、中立な立場をとっていた³⁰⁾。こうした方針を貫徹するために、一人の執筆者の記事を複数回掲載することを避けていた。掲載回数最多を誇る執筆者であっても、最多4回掲載されたのみである（紙面に掲載されている執筆者名は偽名であり、4回以上掲載されていた可能性も否定できない³¹⁾）。また、文化大革命に関しても、それを否定する意見のみならず肯定する意見も掲載されていた³²⁾。

内容は、外国の映画の観後感³³⁾から「四人組」に関するものまで、非常に多様である。この中でも驚くべきことは、当時、中国共産党は中華民国に関する情報を制限していたにもかかわらず、『求是報』第5期（1979年3月16日）に「中華民国臨時憲法」が掲載されていることである。これに関して、劉勝驥は国民党の地下工作員の活躍による傑作である³⁴⁾、と論じている。

また、編集部の住所について第1期に「北京、門内、You Fan 胡同 San San 号 鮑 Hui Suh 同志」と書いてあるのみで、明確に記載されていないと指摘されていたが³⁵⁾、本稿の筆者は第5期の5頁の下部に、上記住所のうちピンインで表記されている部分も漢字で書かれていることを発見した。住所は以下の通りである。「北京、門内、油坊胡同33号」である。残念ながら、名前の部分に関しては、判読できなかった。

『求是報』編集部は、他の編集部のように外国の通信社の取材を受けることはなかった。そのため、『探索』の存在はあまり外国人には知られていなかった³⁶⁾。

本出版物は、毎週日曜日午前11時及び午後5時に西単民主の壁において販売され、また通信販売もされていた³⁷⁾。

（2）『求是報』第16期（1979年10月27日）の内容

『求是報』第16期（1979年10月27日）は、合計8ページからなり、4本の記事を掲載している。本稿では、重要と思われる3本の記事について論じる。

（a）願需「如何理解“各取所需”（“按需分配”）？」

この記事において、著者である願需は、マルクスの「ゴータ綱領批判」の一部を引用し、一部の人間は「各尽所能、各取所需（按需分配）」の概念を誤解していると批判する。そして、「各取所需」について自身の考えを述べている。願需のいう誤解とは、社会が如何に発展しようとも、社会において生產品が如何に豊富

であろうとも、何か欲しい時にはどんなものでも得ることができる、といったことは、例えば、海外旅行に行きたい者すべてに飛行機を与えることができないように実現不可能で、よって共産主義社会を実現することはできない、という考え方である。これに対して、願需は以下のように反論する。毎年、1人1枚の旅行券を配ることで、旅行の問題は解決できる。また、社会がこうしたことを実現することが可能なレベルに達していないのならば、配布の期間をより長くすればよい。このようにすれば、低いレベルでの「各取所需」を実現できる、と。そして、願需は自身の考えを用いれば共産主義の高級段階は、最終的には実現できるであろうし、現段階においては、依然として「按劳取酬」を行うべきではあるが、ある方面においては、すでに低いレベルの「各取所需」を実行することができる、と主張している³⁸⁾。

(b) 浩浩「共産主義社会は“蜂群”組織嗎？」

本記事において著者である浩浩は、共産主義社会はまるで蜂の群れのような社会（蜂群組織社会）であると考えている人々がいるとして、この理解を批判している。こうした一部の者たちは、共産主義社会の「各取所需、按需分配」と蜂群のそれは同じであると主張している。浩浩は、この主張を人間と蜂の違いをあげて否定している。すなわち、蜂の社会において「各尽所能、各取所需」はもともと存在するが、人間社会においては社会が発展し共産主義の高級段階に至って初めて実現する、という点において両者は異なっている。そして、蜂と人類の「各尽所能、各取所需」を同一とみなすことはマルクス・レーニン主義に反し、この観点に基づいて社会建設を実行するようなことがあれば、これは社会主義革命とその建設、そして共産主義運動を破壊することになる、とも主張している。また、著者は社会主義社会と共産主義社会に関して、以下のような指摘を行っている。社会主義社会は「各尽所能、各劳分配」の原則を採用しているため、各人の間で物質的な、そして文化精神的な方面において量と質の差が存在する。しかし社会が不斷の発展を遂げ、共産主義の高級段階に至ったとき、そこには社会主義段階の弊害は存在しておらず、「各尽所能、各取所需」を実現できるのである、と³⁹⁾。

(c) 綿綿「林彪“四人邦”極左路線の危害(続)問答」

本記事において、著者の綿綿は林彪・四人組の極左路線は政治においてどのような危害を生んだのか、という問いに答える形で、林彪及び四人組を批判している。上記の問いに対して、著者は以下のように答える。第1に、林彪と四人組は、無産階級のための「継続革命」を破壊し、重大な危害を与えた。本来、「継続革命」

とは、一切の階級を消滅させるためのものであった。しかし、彼らは、老幹部＝民主派、民主派＝走資派という公式を作り上げ、老幹部たちを彼らの不正な革命の対象とした。彼らの「継続革命」とは、すべての有能な者たちを消滅させるものであって、これは本来の意味における正しい「継続革命」と老幹部、革命家を弾圧したのだ、という。第2に、林彪と四人組は無産階級専制の国家機関を、骨抜きにした。彼らは、国家機関を消滅させようとしたのではなく、むしろ骨抜きにすることによって彼ら自身に仕える国家機関を作り、真の革命家と人民を鎮圧したのである、とする。第3に、彼らはいわゆる「全面専制」の反動スローガンを提唱し、民主の原理を転覆させ、無産階級の民主と社会主義法制を根本から破壊した。彼らの「全面専制」は、すなわちファシズムであった。林彪と四人組は彼ら少数の者が多数を強制するという異常な状態を作り出し、党と国家、人民に非常に大きな損害を与えた、という。

著者は、以下のようにまとめる。彼らは野心家の寄せ集めや陰謀家、冒険分子、心を売った投機家などを頼りに、憲法と法律を覆し、法律の手続きに則った選挙によって選ばれた各級人民代表大会と各級政府をひっくり返した。そして狂ったように叩き、打ち、奪い、盗み、捕え、残酷にすべての正しい革命家と人民群眾を弾圧したのだ、と⁴⁰⁾。

(3) 『求是報』第16期の内容の解釈と各記事の分類

第1に「如何理解“各取所需”(“按需分配”)?’及び「共産主義社会は“蜂群”組織嗎?’において、これらの記事の著者たちは、今日の社会主義社会では社会の生産力が不十分であるため労働に応じた分配に甘んじるほかないが、生産力が発展するにつれ必要に応じて分配することができるようになるであろう、と述べている。こうした主張は、前述の問い4、すなわち、彼らがどのように社会主義をとらえていたのか、という問題に答えることができる。彼らは、社会の生産力は発展を続け、最終的には共産主義社会が到来すると考えていた。

第2に、「林彪“四人邦”極左路線の危害(続)」においてその著者は「継続革命」とは旧社会の構造や階級を消滅させるためのもので、プロレタリアート専制国家は「継続革命」を続けなければならないはずであったが、林彪と「四人組」が「継続革命」を捻じ曲げてしまい、その結果、プロレタリアートのためにあるべき「継続革命」が破壊されてしまったと主張している。この主張は前述の問い1と6、すなわち毛沢東をどのようにとらえていたのかという問いと著者たちは

今後の中国がいかなる方向に進むべきであると考えていたのかという問いに回答を与えている。著者は毛沢東の提唱した「継続革命」を肯定的に捉えている。そして、今後の中国においても「継続革命」を続けていくべきであると考えている。また、本来、毛沢東の「継続革命」は続けていかなければならないものであったが、林彪と四人組によって台無しにされたことと主張している。こうした記述から、著者は林彪と四人組が毛沢東の考えを捻じ曲げ、その結果、中国に大きな災難が訪れたのだ、と考えていると分析できる。であるならば、著者は一見、四人組らを批判し新しいことをいっているように見えて、以前から存在していた路線への帰帰を求めているにすぎないのではないだろうか。

上述の各記事を分類枠組みにあてはめて分類する。「(a) 如何理解“各取所需”(“按需分配”)?’及び「(b) 共產主義社会是“蜂群”組織嗎?’は、Cに分類される。「(c) 林彪“四人邦”極左路線的危害(続)問答」は、Aに分類される。

4 『四五論壇』

(1) 『四五論壇』の性格

『四五論壇』は1978年11月26日、鉄道作業員であった徐文立らによって創刊された。この『四五論壇』は地下出版物の第1号と呼ばれる⁴¹⁾。『四五論壇』は徐文立の『四五報』と劉青らの『人民論壇』が合併してできたもので、『四五報』の「四五」と『人民論壇』の「論壇」を合わせ『四五論壇』と命名された⁴²⁾。『四五論壇』の初期のものは販売されず、単に西単民主の壁に大字報の形で掲示されるのみだった⁴³⁾。『四五論壇』の編集者たちは、正式な出版物と認められようと自ら納税を申し出たが政府からは正式な承認も、また正式な反対もなされなかった⁴⁴⁾。

『四五論壇』は合計で15期発行された。『四五論壇』は社会主義民主を訴える地下出版物の代表的なものであり⁴⁵⁾、劉勝驥はこれを「温和派民刊」と称する⁴⁶⁾。『四五論壇』の趣旨について班璋は、公民の思想言論の自由を認めた中華人民共和国憲法第45条に基づき活動することであったと指摘している⁴⁷⁾。

販売価格には、通常価格の2角と寄付を目的とした価格である4角の2種類があった⁴⁸⁾。支出に関して『四五論壇』11期には1979年6月30日締め決算表が掲載されている。この表によれば、上半期の収入は総計2264.52元(含む220元の借入)であり、このうち『四五論壇』の定期購読による収入が424.4元、販売によるものが1476.12元であった。対して、支出は1620.93元であった。支出のうち、その

多くは印刷費に充てられていた⁴⁹⁾。すなわち、6月30日までの上半期において、『四五論壇』編集部は、423.59元の純利益を上げていたこととなる。

(2) 《四五論壇》編集部主編『四五論壇』13期(1979年10月)の内容

『四五論壇』第13期(1979年10月)は、62頁からなり合計20本の記事を掲載している。本期の出版の目的は1967年に『中学文革報』において「出身論」を発表した遇羅克が逮捕されたことは冤罪であったと主張し、これに抗議するとともに彼の意見に対する支持を表明することである。本期には彼を支持する記事が多数掲載され、4ページから16ページには「出身論」の原文が加除筆されることなく掲載されている⁵⁰⁾。本論文は北京の春を対象としているため、この「出身論」に関しては、分析と分類の対象とはしなかった。しかし、その内容の重要性に鑑み、記事の内容は示すこととした。また、本期には多くの詩が掲載されているが、詩に関しても分析及び分類の対象とはしなかった。

本期46ページにある「全国民刊的專欄」には、班璋の前掲論文巻末の地下出版物一覧表には掲載されていない温州の「四五学社」という地下出版物が名前のみではあるが紹介されていた。

(a) 編集按(筆者注:まえがき)

本記事は、『四五論壇』14期出版の目的を「出身論」を執筆したことにより逮捕された遇羅克を支持することである、と説明している。そして、遇羅克の冤罪が依然として解決されていないことから、この問題を自身で解決しようと「中華民族的好兒子遇羅克永垂不朽」⁵¹⁾というコラムを作ったと説明している。本記事は遇羅克を若い共和国とともに大きくなり、逆境の中で成長した屈強な戦士であった。そして、彼は中華人民共和国を傷つける左傾路線への挑戦者の1人であり、30年間にわたる中国の思想開放運動の先駆であり、中国青年の模範であると紹介している⁵²⁾。

(b) 石樺生「一份工人馬克思主義的理論文獻」

この記事は、遇羅克の「出身論」を再評価するものである。石樺生は「出身論」について、その原文を引用し内容を紹介したうえで、評論している。著者は「出身論」に関して若干の問題点を提起してはいるものの、おおむね肯定的に評価している。対して、官僚主義と林彪・四人組の一派については痛烈に批判している。

著者は文化大革命を、我が国の社会における内部矛盾が先鋭化されて表れてきたものである、と定義している。そして、文化大革命について以下のように述べ

る。人々がいかなる見方をもとうとも、文化大革命は人々の意識の中に深刻な痕を残し、ただ行き当たりばったりで生活していたのでなければ、やはりこの痕の中に何かしら有益なものを見つけることができるだろう、と。

「出身論」に関しては以下のように主張する。出身問題が急速に深刻な社会問題となった時、1人の若い工人であった遇羅克同志が立ち上がり正義を主張し、マルクス主義の理論を明らかにした、と。

著者は自身の考えも示している。「出身論」は柔らかな言葉を用いており、かつ明確に官僚組織を批判しているわけではない。しかし、「出身論」の発表に対して返ってきたものは手錠であり、銃弾の応報であった。この事実は、人々が官僚勢力の形成とその状況について論述することができないということを示しており、官僚勢力は人々が彼らを見くびることを許さないということを無情にも示したのである。こうした勢力の存在と発展は人民共和国を生命の危機にさらしているのだ⁵³⁾。

(c) 遇羅克「出身論」

「出身論」は遇羅克によって執筆され、文化大革命中の1967年に『中学文革報』に掲載された。『四五論壇』13期は、これを転載した。「出身論」の目的は、長きにわたって深刻な社会問題であった「出身問題」に対する答えを、毛主席の著作と社会の実践を通じて見つけ出すことであった。

著者は「出身論」において毛沢東の言葉を多く援用し、「出身」を重視しすぎることを強く批判している。毛沢東の言葉の中に「出身」という基準はない、出身の良し悪しと本人の革命にはどのような関係があるか、というのが著者の主張である。また、無産階級革命の偉大な指導者であるマルクスやレーニン、毛主席の出身はいずれもよくない。問題の鍵は、出身ではなく、思想改造にある。出身のよくないものを安全ではないと見ることは、階級の観点に立っているのではなく「階級偏見」である、とも主張している。最後に、著者は青年たちに向かって以下のように呼びかける。一切の反動勢力の迫害を受けている革命青年たちよ、毛沢東思想の旗のもと団結せよ、組織せよ。我々は党を信頼し、毛主席の「徹底的な唯物主義者に畏れるところなし」という教えをしっかりと憶えなければならないのである、と⁵⁴⁾。

(3) 『四五論壇』13期の内容の解釈と各記事の分類

遇羅克は自身の著作「出身論」において、マルクスの理論に忠実であるべきだ、

と主張している。『四五論壇』第13期に掲載されている記事は往々にして、この遇羅克の「出身論」に同調している。このことから、以下のことがいえるだろう。

第1に、編集部によって書かれた「編者按（筆者注：まえがき）」に関して、以下のことがいえる。本記事の著者曰く、遇羅克は中国青年の模範である。ということは、中国青年は遇羅克のようにマルクス主義に忠実であるべきだ、と考えていたのである。これは、第4の問いと第6の問いに答えを与える。すなわち、本記事の著者は、中国は社会主義を標榜する以上、マルクスに忠実であるべきで、また今後の進むべき道もマルクスに忠実であるべきである、と考えていたことが分かる。

第2に、「一份工人馬克思主義的理論文献」の著者である石樺生に関して以下のことを指摘できる。石樺生は文化大革命について、これは官僚主義に対する反抗の結果であったと説明している。そして、文化大革命が悲惨な結果をもたらした理由は、運動の指導者たちの認識不足であったと主張している。これは問い2に答えを与える。すなわち、著者は文化大革命それ自体には問題はなかったが、革命を指導した者たちに問題があったのだと考えていたということだろう。

第3に、石樺生は遇羅克を高く評価したうえで、多くの共産党員がマルクス主義を十分に理解していないと批判している。このことから、マルクス主義に立ち返るべきであると考えているといえるだろう。これは問6、すなわち今後の中国の進むべき針路に対する答えである。著者が未来を見るとき、その視座はマルクス主義におかれている。このことから、この著者は一見未来を見ているようで、過去の理論への回帰を主張しているにすぎないといえるだろう。

各記事を分類枠組みに当てはめて分類する。「(a) 編者按（筆者注：まえがき）」及び「(b) 一份工人馬克思主義的理論文献」は、どちらもCに分類される。「(c) 出身論」は1967年に発表されたものであり、本論文は「北京の春」における政治的要求を対象としているため、分類の対象とはしないが、あえて分類するのならばAに属するだろう。

(4) 《四五論壇》編輯部主編『四五論壇』14期（1979年11月）の内容

『四五論壇』14期（1979年11月）は、76頁からなり、記事のほとんどは北京西単民主の壁誕生1周年と『四五論壇』創刊1周年を祝うものである。本期の特徴として、多くの詩が掲載されていること、そして楽譜つきの歌が掲載されていることがあげられる。合計23本の記事と詩、歌が掲載されている。

(a) 石樺生「審視自己興周囲環境」

本記事において石樺生は民主の壁1周年を祝いつつ、民主運動に関する現状と課題を示している。著者は以下のように指摘する。1つ目に、運動に参加している活発なものは、いずれも内部的なそして外部的な制約を受けている。そして、未だに十分に広範な労働大衆と団結することができていない、と。2つ目に、我が国の広範な民衆の生活状況は、民主運動に対して強固な基盤を提供することができない。こうした状況下で、民主運動は運動を破壊しようとする準備している官僚勢力に立ち向かい、自身の弱点を克服し、さらに多くの労働大衆と接触し、彼らに受け入れてもらう必要がある、と。

著者は、共産党と政府に目を向ける必要があるとも述べ、共産党員を以下のように批判している。そもそもマルクスは彼が青年であった頃、「出版の自由」に対して、その他の自由とは異なる「人類普遍の自由」という特別の意義を与えていた。しかし、現在の共産党員はこのようには考えていないようである。我々の目前にある政府当局はマルクス主義を深く研究していないのである、と。

記事の最後、著者は以下のように主張する。政府当局は表面的には敵意を示していないが民主運動からは距離をとっている。これは民主運動にとって、そして民族の発展にとって、非常に有害である。私の思うところによれば、もしも共産党と政府がエンゲルスなどを本当に自身の師と仰ぎ、かつ自身の提唱した「四つの基本原則」を信じるのならば、態度を改めるべきであろう、と⁵⁵⁾。

(b) 北京一個鉄路工人「解放思想 明辦真理」(1978年11月22日)

本記事において著者は、毛沢東の再評価を促している。しかし、再評価の目的は決して毛沢東を批難し、その評価を貶めることではない。著者は以下のように問う。毛主席は間違いを犯したのか、と。この問いに対して著者は、質問をもって答えている。毛沢東の支持がなかったのならば、林彪が登場することはあったのだろうか。毛主席は江青の行ってきたことを知らなかったのだろうか。毛主席は張春橋が造反だと知らなかったのだろうか。毛主席の同意がなかったら、四人組は反鄧小平キャンペーンを行えたのだろうか。毛主席が頷かなければ、天安門事件が反革命事件と成り得ただろうか、と。続けて以下のように主張する。毛沢東は、人間であり、神ではない。毛沢東を正しく評価するべき時が来た、と。著者は一見すると毛沢東を批判しているように見える。しかし、著者は以下のようにも述べている。この再評価は、ただ単に毛主席を批判するものではない。毛主席の威信を守り、正しいマルクス主義、毛沢東思想を掲げるために行うのだ。毛

沢東のように偉大な人物であっても間違いを犯すのだ、ということを知り、初めて広範な幹部や群衆は教訓を受け取ることが可能となり、林彪や四人組のような政治的な詐欺師が政権をとることを防ぎ、悲劇を繰り返してしまうことを防ぐことができるのだ、と⁵⁶⁾。

(c) 国際歌「致党中央的建議書」

本記事において、著者は党中央に対して合計8つの建議をしている。建議の内容は以下の通りである。1つ目に、健全な党内民主選挙制度を導入し終身制を廃止すること。客観的にみて、人間は自己を否定することを好まない。しかし、ある者の思想や主張、政策、路線が実践を経て誤っていると分かった時には、それは否定され正されなければならない。しかし、終身制は、その否定を遅らせてしまう。この問題を解決するために、党内民主選挙の導入と終身制の廃止が必要である、という主張である。2つ目に、文化大革命の再検討をすること。著者は、文化大革命を以下のように説明する。その発生の原因は、劉少奇と毛沢東の対立にあった。文化大革命は民主集中制を破壊し、奴隷主義と封建ファシスト専制の極左主義路線の下、順調に発展していった。文化大革命を直接領導した「中央文革」には何1つよいものなどなく、また文化大革命の過程で肯定できるものを見つけることは難しい。今日、四人組が粉碎されて2年余が過ぎているが、文革から未だ脱していない。よって再検討することが必要である、と。3つ目に、毛沢東に対する期間を分けたいという再評価をすること。著者自身は毛沢東を以下のように評価している。毛沢東の功績は、その誤りを覆い隠すことのできるものではない。しかし、その誤りもまた、功績を否定できるものではない。毛沢東は数十年の革命闘争の中で、人民に愛された。これは正常なことである。しかし何事にも、反面がある。毛主席は、自身に誤りがあると言ったことがあるが、この発言は十数年の実践と痛みによって証明された、と。4つ目は、党の歴代の指導者を再評価すること。5つ目は、劉少奇に対して審査を改めて行うこと。著者は、劉少奇の案件は大混乱の中で行われたもので、安定した今日、改めて審査するべきである、と主張している。6つ目は、将来、文化大革命の真相を人民に明らかにすること。7つ目は、周総理記念館を建設すること。最後に、大衆に大小のグループでの討論や弁論の形式で10年間にわたる運動の総括を行わせ、次回の党代表大会で人民を抛り所とした10年間の運動の総括を行うことである⁵⁷⁾。

(d) 一名首都工人「迎接祖国美好的春天」(1978年11月25日)

本記事において著者は毛沢東に対する再評価を試みている。そして、林彪・四

人組と毛沢東に対して否定的な見解を示している。著者は中国の現状を以下のようにとらえている。四人組の害悪から脱し、華主席と鄧副主席の下、「四つの近代化」に向けて進んでおり、同時に、窒息させられていた思想が、党中央の号令のもと歩み始めている、と。

著者は、こうした中、1つの重要かつ切迫した問題が存在していると主張する。それは、神格化された毛沢東に対する評価である。この問題に関して著者は、ある者たちの主張している毛主席は林彪と四人組の作り出した偽の状態に惑わされたのである、という考えに疑問を呈したうえで、以下のように毛沢東を批判している。例えば、毛主席は以前、全国の安定団結はよいことだ、といった。しかし、しばらくすると8億の人々はなぜ闘争しないのか、といったし、数十年前には集団指導を強調したが、数十年後には個人による領導が政治局において正しい意志である、といった。このように一貫性がないことは国家に対して、そして人民に対して責任を負っていないということであり、思想にも深刻な問題がある、と。そして、経済政策に関して下放は誤りであったと指摘している。

著者は最後に以下のように述べている。幾千年もの封建の歴史と百年来の人民の闘争は我々に1つの真理を伝えた。それは、希望を健全で、有効で、科学的でそして民主的な制度に託すべきである、ということである。そして、いかなる者もこの制度を遵守しなければならず、この制度によって人民の幸福を図らなければならない、ということである、と。本記事は、以下のように締めくくられている。我々青年のこの世代は、本来、天真かつ純潔で幼稚な子供であった。そして、青春の時を林彪・四人組の封建制の下で過ごし騙されてきた。今日、民主の世界にいたって心情が激しく揺れ動いている。自然科学における近代化は、社会科学の近代化と切り離すことはできない。「四つの近代化」のために、人民民主制度の健全のために、祖国の明日のために、我々の心の耳をもって、あの美しい春を迎えよう、と⁵⁸⁾。

(5) 『四五論壇』14期の内容の解釈と各記事の分類

第1に、「審視自己興周囲環境」において石樺生は「出版の自由」は「人類普遍の自由」であるというマルクスが青年であった時の考えを用いて共産党を批判している。このことから、2つのことがいえるだろう。1つ目は、著者は共産党たるものマルクスの考えに忠実であるべきだ、と考えていた、ということである。2つ目は「出版の自由」、ひいては「表現の自由」は人類にとって普遍的な自由

であるという考えを理解していた、ということである。これは第7の問い、すなわち「民主」に関する構想力に関する問いに答えを与える。著者は、出版の自由という「民主」を実現するためには欠かせない自由を普遍的なものであると理解していた。

第2に、「論民主辦報」及び「致党中央的建議書」、「迎接祖国美好的春天」の著者はいずれも、第1の問い、すなわち毛沢東をどのように捉えていたのか、という問いに対して答えを与えている。「論民主辦報」の著者は以下のように述べる。毛沢東も人間であり、間違いは犯すのだ、と。この著者は、毛沢東をもはや神格化していない。「致党中央的建議書」の著者も毛沢東を全面的には肯定しておらず以下のように述べている。毛沢東は、革命闘争において人民から愛された。しかし、何事にも反面があり、毛沢東にも欠点があった、と。当時、地下出版物に投稿していた者の中には、これらの記事の著者と同じく、毛沢東が神格化されていた時代の毛への評価とは異なった毛沢東は偉大な指導者であったが大きな間違いを犯した、という考えをもつ者が多々見られる。また「迎接祖国美好的春天」の著者のように毛沢東を一貫性がなく国に対して、そして人民に対して責任を負っておらず、かつ思想的にも深刻な問題があると手厳しく批判する者もいる。こうしたことから、地下出版物が多数発行された1979年前後において、人民の心の中の毛沢東はすでに絶対不可侵の神聖な存在ではなくなっていた、とができるだろう。

第3に、「致党中央的建議書」と「迎接祖国美好的春天」の著者は第6と第7の問い、つまり国の未来と民主を構想する力に関係する問題に答えている。「致党中央的建議書」の著者は、健全な党内民主選挙制度の導入と終身制の廃止を求めている。この著者は、国にとって選挙、ひいては民主が必要であること、そして終身制のもたらす害悪が大きいこと理解していた。この意見は一見、とてもリベラルなものに見える。しかし、選挙の導入も党内に限られており、共産党による支配という考えからは脱してはいなかった。こうしたことから、やはり彼らの民主的な構想力には一定の制限があったといわざるを得ないだろう。同様に、「迎接祖国美好的春天」の著者も、我々は希望を健全かつ有効で科学的な民主制度に託すべきであり、この制度をもってして人民の幸福を図るべきである、と主張している。しかし、どのような民主制度が「健全で有効で科学的」なのかは示していない。本記事の著者も、国は「民主」という道を歩むべきであると理解はしているが、具体的にどうすればよいのかは論じきれていない。こうしたことから、

やはり民主的な構想力には限度があったといわざるを得ない。

第4に、「迎接祖国美好的春天」の著者は「四つの近代化」を肯定的に捉えている。この問いは、第3の問いに答えを与える。本記事の著者は、鄧小平に対して肯定的な見解をもっていたと考えられる。

各記事を上述の分類枠組みにあてはめ分類する。「(a) 審視自己興周囲環境」はCに分類できる。「(b) 解放思想 明辨真理」はAに、そして「(c) 致党中央の建議書」はDに分類される。最後に「(d) 迎接祖国美好的春天」はBとDの間に分類できるだろう。このように『四五論壇』第14期にみられる主張はバリエーションに富んでいる。

おわりに

本論文は、先行研究において用いられてこなかった合計4種類の地下出版物の内容を明らかにするとともに、各記事を分析し、それらを分類枠組みにあてはめて分類した。扱った記事の内容は多種多様で、例えば日常的な社会問題から国際関係、毛沢東を擁護するものや批判するもの、党中央に対する建議書や過去の文章を紹介するものなど、広範な内容にわたった。一見すると、各著者たちは自身の思うところを自由に述べており、その内容に共通する点はないように思われる。しかし、各記事のいわんとするところを丁寧に分析し分類すると、もちろん例外もあるが、以下の共通点が見られる。

1つ目に、いずれの著者も林彪・四人組を否定的に捉えている。管見の限り、林彪・四人組について言及した者はすべて、彼ら彼女らを否定している。2つ目に、ほぼすべての著者が、社会主義の道を歩むべきであると捉えている。3つ目に、いずれの著者も、自国を愛しており、どうにかして改善しようと試行錯誤している。しかし、中国共産党の指導に対して正面から挑もうとする者はほぼ見受けられなかった。4つ目に、これから中国が歩むべき道について、多くの著者が過去の中に答えを見つけようとしている。未来を見ているようで過去を振り返っている、ということである。言い換えれば、一度踏み外してしまった道を今度は踏み外さないように進もうとしていたのである。こうした考え方は、洋の東西を問わずして見られるだろう。こうした共通点は、新しい時代を迎えるにあたり、若者たちがどのように新しい時代に立ち向かおうとしていたのか、その理解の一助となるだろう。

最後に、本研究の意義について触れたい。多くの青年たちは決して十分とはいえない物資や環境のなか、地下出版物を発行し続けた。そうした、彼ら彼女らの情熱の賜物ともいえる地下出版物の記事のうち、今まで明らかにされてこなかったものの内容を明らかにしたことには大きな意義があるだろう。

謝辞

本研究において用いた地下出版物の原本は、本塾東アジア研究所所長である高橋伸夫教授より提供を受けたものである。卒業論文の執筆にあたり、こうした一次資料を用いることができ本当に幸せに思う。この場を借りて高橋伸夫教授に心から御礼申し上げる。

- 1) 班瑋「現代中国における人権論の展開：『北京の春』運動を中心に」『山陽論叢』第2巻山陽学園大学1995年、85頁。
- 2) この出版物に掲載されている記事のいくつかに、下線及び日本語のコメントが付されている。管見の限り、当該出版物の記事が引用されているなど、先行研究において用いられた明確な形跡はないが、その内容が何らかの形で研究に用いられている可能性は否定できない。
- 3) 『大陸地下刊物彙編』の各輯出版年月日は以下の通りである。第一輯は1980年6月30日。第二輯は1980年11月30日。第三輯は1981年4月30日。第四輯は1981年7月31日。第五輯は1981年9月30日。第六輯は1981年12月30日。第七輯は1982年1月31日。第八輯は1982年3月31日。第九輯は1982年5月31日。第十輯は1982年8月31日。第十一輯は1982年10月31日。第十二輯は1982年12月31日。第十三輯は1983年2月12日。
- 4) 班瑋、前掲論文、85頁。
- 5) 同上、105-110頁。「地下出版物一覧表」によれば、当時、北京のみならず中国全土で多くの地下出版物が発行されていた。
- 6) 天兒慧ほか編『岩波現代中国辞典』岩波書店、1999年、1125頁。
- 7) 班瑋、前掲論文の巻末一覧をもとに集計した。
- 8) 同上。
- 9) 『書屋』二〇一六年年第四期（総第二二期）中南出版传媒集团股份有限公司2016年、舒婷「有些事、這輩子都刻骨銘心」19-22頁。
- 10) 班瑋の前掲論文105頁では、1979年1月9日発行と、劉勝驥『中国大陸地下刊物研究（一九七八—一九八二）』台湾商務印書館（中華民國74年、1985年）では1月8日とされている。なお、『大陸地下刊物彙編』第一輯1頁に、表紙の写真が掲載されているが、文字が擦れており1月以降の文字が判別不能である。
- 11) 劉勝驥『中国大陸地下刊物研究（一九七八—一九八二）』台湾商務印書館（中華民國74年、1985年）、1頁。

- 12) 同上、2頁。
- 13) 同上。
- 14) 『大陸地下刊物彙編』第一輯2頁から全文が掲載。原文タイトルは「第五個現代化—民主及其他」。
- 15) 《探索》編集部『探索』5期(1979年10月1日)、19頁。
- 16) 劉勝驥『中国大陆地下刊物研究(一九七八—一九八二)』台湾商務印書館(1985年)、9頁。魏京生の住所は、北京阜外四巷6-8号。
- 17) 《探索》編集部『探索』5期(1979年10月1日)、2頁。路林の住所は北京市朝阳区幸福2村立单元4号。
- 18) 同上。
- 19) 同上。
- 20) 同上、1頁。
- 21) 同上、3頁。
- 22) 同上、5頁。原文は「步子走得再快一点、思想再解放一点」である。
- 23) 同上。原文は「這一点」。
- 24) 同上、3-6頁。
- 25) 同上、14頁。
- 26) 同上、17頁。原文は「今天、在中蘇两国政府談判之際、我們向世界鄭重声明、中国人民和世界各国人民一樣地需要和平」。
- 27) 同上。
- 28) 同上、25-32頁。
- 29) 劉勝驥、前掲書、311頁。
- 30) 同上。
- 31) 同上。
- 32) 同上、315頁。
- 33) 『求是報』第16期(1979年10月27日)、8頁。メキシコの映画「YESENIA」(1987)の観後感。映画の内容は、ロマ人の女性と軍人の恋愛を描いたもの。
- 34) 劉勝驥、前掲書、310頁。
- 35) 劉勝驥、前掲書、310頁。
- 36) 同上。
- 37) 『求是報』第16期(1979年10月27日)、表紙。
- 38) 同上、1-2頁。
- 39) 同上、3-5頁。
- 40) 同上、6-7頁。
- 41) 班瑋、前掲論文、85頁。
- 42) 劉勝驥、前掲書、117頁。
- 43) 同上、120頁。
- 44) 同上、119-120頁。
- 45) 班瑋、前掲論文、89頁。

- 46) 劉勝驥、前掲書、117頁。
- 47) 班璋、前掲論文、89頁。
- 48) 同上、118頁。
- 49) 「大陸地下刊物彙編」專案小組『大陸地下刊物彙編』中共研究雜誌社、第七輯、7頁。
- 50) 《四五論壇》編輯部主編『四五論壇』第13期（1979年10月）、4頁、5-16頁。「出身論」の始まりは5頁目。16頁目以降は、4頁に戻る。
- 51) 表紙の裏面に「中華民族的好兒子遇羅克永垂不朽」と記されている。
- 52) 《四五論壇》編輯部主編『四五論壇』13期（1979年10月）、1頁。
- 53) 同上、1-3頁。
- 54) 同上、4-16頁。
- 55) 《四五論壇》編輯部主編『四五論壇』14期（1979年11月）、1-3頁。
- 56) 同上、9-10頁。
- 57) 同上、11-15頁。
- 58) 同上、21-25頁。

参考文献

〈中国語〉

- 北京《四五論壇》編輯部主編『四五論壇』13期（1979年10月）。
 ——『四五論壇』14期、慶祝北京西单民主墻誕生一周年記念刊、慶祝北京《四五論壇》創刊一周年記念刊、増刊（1979年11月）。
 「大陸地下刊物彙編」專案小組『大陸地下刊物彙編』中共研究雜誌社、第一輯から第一三輯、出版年については、本論文文末脚注を参照されたい。
 劉勝驥『中国大陸地下刊物研究（一九七八-一九八二）』台湾商務印書館、中華民國74年（1985年）。
 『求是報』第16期（1979年10月27日）。
 舒婷「有些事、這輩子都刻骨銘心」、『書屋』二〇一六年第四期（総第二二期）中南出版传媒集团股份有限公司2016年、19-22頁。
 《探索》編集部『探索』5期（1979年10月1日）。
 中共中央文献研究室『鄧小平年譜（1975-1997）』中央文献出版社（2004年）。

〈日本語〉

- 天児慧ほか（編）『岩波現代中国辞典』岩波書店、1999年。
 天児慧『中華人民共和国史 新版』岩波書店、2013年。
 安藤正士『現代中国年表 1941-2008』岩波書店、2010年。
 柴維（著）戸張東夫（訳）『北京の春』日中出版、1980年。
 小林幹夫「中国の反体制派—北京の春の終わり（ベトナム戦争以後）」『海外事情』27（6）、拓殖大学海外事情研究所、1979年、51-59頁。
 ジョナサン・スペンス（著）小泉朝子（訳）『毛沢東』岩波書店、2002年。
 チイ・ハオ、ルネ・ビエネ（編）山田侑平、小林幹夫（訳）『現代中国双書 9 李一

哲の大字報』日中出版(1977年)。

辻康吾『北京激動—中国の民主』岩波書店、1989年。

班璋「現代中国における人権論の展開:「北京の春」運動を中心に」『山陽論叢』第2巻、山陽学園大学、1995年。

〈英語〉

Burns, John, “Democracy, The Rule of The Law, and Human Rights In Beijing’s Unofficial Journals, 1978-1979” *Internationales Asienforum* Vol. 14, Issue 1 (1983).

Vogel, Ezra F, *Deng Xiaoping and the Transformation of China*, Belknap Press (2011).

Garside, Roger, “Coming Alive CHINA after MAO” *Andre Deutsch* (1981).

〈フランス語〉

Gandini, Jean-Jacques, “1978: Le Printemps De Pekin” *Revue d’Histoire Populaire*, Issue 45/46 (1989).